

潮流

こだま おそ 木靈への畏れ

農林中金総研の刊行物に寄稿するのはこれで3度目である。今回も、金融とか経済の専門的な内容でなく恐縮している。

先日新聞を繰っていると、某週刊紙の発売予告の見出しに「しがみつき症候群」というのがあり、多少人生を考えるようになってきた小生にとって、なかなか意味深な文言として受けとめた。この週刊紙を読んだわけではないので、これから書くことは週刊紙のそれとはまったく無関係である。「しがみつく」とは「強くとりつく」の意（辞苑）である。問題は何にとりつくのかである。

この社会を構成しているのは、いろいろな形態の「組織体」であり、「個（人）」である。そして「組織体」は当然「個」が構成している。これら社会の構成員は何にとりつくのか。極めて乱暴に割り切って言えば、構成員の営み、生活が、「現在又は現在よりよくなる事」又は営み、生活に不都合が生じた場合「それを隠す事」であろう。「事」の内容は複雑であるが、わが国のような、先進国と称される国では、それが、制度、システムによって担保されていることが多い。多いというより、個人の基本的人権を含め、営み、生活のすべての分野が制度、システムによって担保されていると言つてよい。社会の構成員が、この「事」にとりつくのは当然の対応ということであるが、「強くとりつく」ことになると、一般的にはその「強さ」の分だけ他が割をくうか、その制度、システムが社会における適応性を欠き、変革が求められている場合には、その変革が妨げられることになる。つまり、強くとりつく（しがみつく）ことは社会全体にとってマイナスまたは既得権維持につながることが多い。

では、「組織体」内ではどうであろうか。社会全体とほぼ同様の状況が現出すると言ってよいのではないか。ただ、組織体の場合、どのレベルであろうと、そのトップが「事」にしがみついた場合は、個にとってより身近かな分、深刻である。悪くすると、組織体の崩壊、ひいては営み、生活の危機に立ち至るからである。このようなトップ像を最近の不祥事報道でみると、露顕するまで脳天気というのが共通点といつてよい。これは「現状又は現状よりよくなる事」が社会とか組織体にとってではなく、自分自身にとってということだからではないか。このことで、最近お会いした人（仮に甲という。）、小生と共に通の知人である組織のトップについての印象を語った言葉を思い出す。「眺望のよい立派な部屋で会ったんですが、あの人の目はどこも見てません。おそらく、人間が普段往来している道も、いろいろな命を育む黒々とした土も見えていないのではないでしょうか。まさに、雲上の人。組織の人間はすべて下僕としか見ていない、強そうなものには阿ねり、保身のために何でもやりそう。……元の彼はどこに行ってしまったのか。全く恐ろしい。……」このトップに属している組織体が現在表向き何かまずい状況になっているということではない。このようなトップを含めた組織体の姿をすべて分析できれば社会の実相に迫れるのでしょうか、所詮、神のみぞ知る。

この甲の話を聞きながら、私は何故か、若い頃訪れた屋久島の屋久杉に接したときの感動を記した一文を想い起こした。「……千年以下はこすぎで、やくすぎと呼ばれるのは千年を越えた樹齢のもの。屋久杉でなくても私は大木に接すると、何か非常に緊張する、身の引き締まる思いがする。

- 静かに対峙していると、色々なことを語りかけてくれるような気がする、ことがある。これは「大木」が風雪雨 - 自然の厳しさに耐えて年輪を刻んできた、その自信、威厳に打たれるからであろう。昔の人が「木靈」と書いたことが実感としてよく分かる。……」

木靈はおそらく、神同様の感性（先見性、創造力、想像力、判断力、理性の総合）をもつものとして畏れられたのである。

（理事長 高木 勇樹）